

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	唐代龍類小説に於ける龍王像の変容 : 「龍の信義」と創作性をめぐって
Author(s)	屋敷, 信晴
Citation	中國中世文學研究 , 63-64 : 217 - 232
Issue Date	2014-09-29
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051460
Right	
Relation	



唐代龍類小説に於ける龍王像の変容

—「龍の信義」と創作性をめぐって—

屋敷信晴

はじめに

実在・非実在を問わずに中国文化を最も良く体現した存在を挙げるとすれば、龍がその筆頭に挙がるであろうことは想像に難くない。六朝・唐代小説の集大成である『太平広記』には「龍」部として八卷九十四話（うち十三話は「龍」部の下位分類として立てられた「蛟」部）からなる単独の部が立てられている。これは『広記』全九十二部の中で十六番目に多い巻数であることから、人々の龍に対する関心の深さがうかがえる。

しかし、このように多くの龍を題材とした小説（以下「龍類小説」）が著される一方で、その内容を仔細に検討してみると、そこに現れる龍のイメージは決して一様ではないことが分かる。単なる野生動物や家畜のような扱われ方しているものから、人語を解し威厳ある神々の眷属として描かれるものまで、実に多種多様である。この龍の多様性には、古代中国の人々の龍に対する認識の

差異や宗教的背景など、様々な要因が関係していると考えられる。

本稿ではこの多種多様な龍のイメージの中から、唐代小説に登場する「龍神」「龍王」と呼ばれる存在の描かれ方に対して、主に文学的な観点から考察を試みたい。

一 「柳毅伝」について

唐代小説の中で龍王が登場する作品の代表格は、やはり何と言つても李朝威「柳毅伝」であろう。

(1) 落第書生の柳毅は故郷への帰途、美しい娘が羊を放牧しながら泣いているのを見かけた。娘は毅に「私は洞庭龍君の末娘です。先に涇川龍王の次男に嫁いだのですが、夫と義父母にいじめられてこの有様です。」と洞庭君への手紙を言付けた。毅は「私は義侠心ある者です。」と言つて引き受けた。娘は涙ながらに礼を言ひ、洞庭湖に入る方法を教えた。毅が手紙を受け取り、

「私が任を果たしてあなたが洞庭湖にお戻りになられたら、どうか私を避けたりしないで下さいね。」と言うと、娘は「親戚のようにおつきあいさせていただきます。」と答え、姿が見えなくなつた。

(2) 一月余り経つて毅が洞庭湖を訪ねると、武人が波間から現れて毅を水中の宮殿へと連れて行つた。そこで洞庭君に面会した毅は、事情を話して言付かつた手紙を渡した。洞庭君は手紙を読み終わると、泣きながら毅に礼を言つた。

しかし話を聞いた人々が泣き始めると、洞庭君は「錢塘に知られたら大変だ。」と慌てて静かにさせた。錢塘君とは洞庭君の弟であるが、勇猛さが度を過ぎて騒ぎを起こしてしまい、この宮殿に繋がれているという。

しばらくすると轟音が鳴り響いて巨大な赤龍が金の鎖を引きずりながら飛んでいった。毅は恐ろしくて地面に倒れ込み、「どうか生きて帰らせて下さい。」と命乞いをした。しかし洞庭君は心配はいらないと毅を引き留めて宴席を設けた。

(3) しばらくすると洞庭君の娘と錢塘君が帰還した。錢塘君が威風堂々とした立派な容姿で、「賢明なる君子の御陰で姪を助けることができました。」と礼を言うのと、毅は滅相もないとペコペコした。

錢塘君は兄の洞庭君に「奴らと一戦交えてから天界に報告して参りましたところ、天帝は以前の罪も併せてお許し下さいました。」と言ひ、更に六十万人を殺害

し、八百里の作物を傷付け、涇川王は食つたと報告した。洞庭君は錢塘君の軽率な行動をたしなめた。

(4) 翌日、さらに豪華な宴が催され、錢塘君の勇猛さを称えた曲「錢塘破陣楽」や洞庭君の娘の帰還を歌つた曲「貴主還宮楽」が演奏された。宴席では皆が一曲歌つた。洞庭君が毅に宝物を与えると、他の人々も先を争つて毅に宝物を捧げた。

(5) 翌日、また宴席が開かれた。酒に酔つた錢塘君は毅に「義士たるそなたを見込んで頼みがある。どうか我が姪を高義の士たるそなたにお預けしたいのだが。」と言つた。

すると毅は立ち上がり、「錢塘君ともあろう方がこんなにも下らぬ者だとは。私はあなたが鎖を断ち切つて姪御を救いに行くのを見て、果断で実直な方だと思つた。今あなたは立派な姿の上、靈妙なる龍であるにも関わらず、酒の勢いで人間を脅迫するとは、筋が通つていると言えようか。私などあなたにかなうべくもないが、それでも不道の気には屈しない。」と言つた。錢塘君は謝罪し、二人は心の通じ合つた友となつた。

(6) 翌日、毅が別れを告げると、洞庭君の夫人が別れの宴を催した。別れ際に娘の姿を見た毅は、錢塘君の頼みを断つたことを後悔した。そして人界に帰り、もらった宝物の百分の一も売らないでも莫大な財産となつた。二人の女性と結婚したがすぐに亡くなつてしまひ、その後金陵に引越して盧氏の未亡人と結婚した。

(7) 一月程経って、毅はふと盧氏の顔がかの龍女に似ているような気がしたが、否定された。さらに一年程して子供が生まれると、妻は笑いながら「私は実は洞庭君の娘です。あなたに御恩返ししたく思っておりまして、あなたは叔父上のお話を断られてしまいました。あなたはかつて『どうか私を避けたりなさらないで下さいね。』とおっしゃりながら、私との結婚の話を断られました。あなたは本当に結婚がお嫌だったのでしょうか、それとも道理に合わない御願いにお怒りになられただけなのでしょうか。」と言った。

毅は「私がそなたを助けた時は、本当に助けたいと思っただけだった。結婚を持ちかけられた時に断ったのは、筋が通っていないのを怒っただけなのだ。ただ別れ際にそなたの姿を見て強い心残りを覚えた。今日そなたは人間界に居り、私の思いも変わりません。これからはいつまでも仲睦まじくしようではないか。」と言った。妻は涙を流して喜び、毅を連れて洞庭君に会いに行った。

その後、四十年間は南海に住んでいたが、天子が神仙に関心を持って神仙を探し求めたので、毅は妻と一緒に洞庭湖に姿を消した。

(8) 後に毅の表弟の薛蝦が洞庭湖で毅に会った。まずまず若返っていた毅は蝦に仙薬を五十粒贈り、「この薬は一粒で一年寿命を延ばせる。いつまでも人間界に留まっていますはいけません。」と言った。その後、毅の音信は

途絶えた。蝦も五十年近く経った頃、行方が分からなくなつた。

隴西の李朝威はこのことを記して感嘆した。「五虫の中でもその長たる存在は、必ず靈妙なる力を持つている。柳毅は裸虫であるが、信義を鱗虫である龍に通じさせた。洞庭君は筋の通つたことを受け入れる性格で、錢塘君は果断で豪放磊落であつたので、柳毅の信義を受け取ることができた。私はこの話を義であると感じ、この文を記したのである。」

この「柳毅伝」について、かつて近藤春雄氏が「その人間の男と龍女との情事をえがき、はつきり龍宮を幻想しているのは異色であり、まとまつた龍宮譚としては最初のものに属している。しかしそれは単に異類を語り、龍宮をえがくために書かれたというものではなく、一に求め得られぬ幸福を現実のあなたに求め、神仙の世界を夢想することによって自慰せんとしたもののようである。」と評して以来、基本的にこの話は異世界訪問譚、異類婚姻譚、或いはさらに新たな愛情小説へと発展したものととして理解されている。確かに先行研究では、この話の元の題名は「柳毅伝」ではなく「洞庭靈媿伝」であつたと言われており、その題名からすれば、柳毅と龍女の結婚が物語の大きな焦点となつてゐることは明らかである。³⁾

しかし「柳毅伝」の末尾で著者李朝威は次のように言

五蟲之長、必以靈者、別斯見矣。人裸也、移鱗蟲。洞庭含納天直、錢塘迅疾磊落、宜有承焉。蝦詠而不載、獨可隣其境。愚義之、爲斯文。(五蟲の長は、必ず靈なる者を以てし、別斯に見はる。人は裸なるに、鱗を隣に移す。洞庭は天直を含納し、錢塘は迅疾磊落なれば、宜しく承くる有るべし。蝦詠じて載せざるも、独り其の境に隣るべし。愚之を義とし、斯の文を爲す。)

柳毅が人間の身でありながら龍王に「信」を通じさせ、また龍王達も「大直」であったからこそ、柳毅の諫言を受け入れることができたのだと評し、それを嘉してこの物語を記したのだと言うのである。この記載を信するならば、「柳毅伝」は異世界の訪問や異類との婚姻ではなく、龍王と柳毅の信義を固く守り貫き通す姿勢こそがテーマであるということになる。それでは実際に文中では、龍王と柳毅は信義に対してどのような態度を取る人物として描かれているだろうか。

二 「柳毅伝」と「信義」

実際に「柳毅伝」に於ける信義に関する描写を具体的に調べてみると、以下に挙げる原文のような記載が見つかる。

① 毅曰、「吾義夫也。聞子之説、氣血俱動。恨無毛羽、不能奮飛。是何可否之謂乎。然而洞庭深水也。吾行塵間、寧可致意耶。唯恐道途顯晦、不相通達、致負誠托、又乖懇願。子有何術、可導我邪。」

② 有頃、君復出、與毅飲食。又有一人披紫裳、執青玉。貌聳神溢、立於君左右。謂毅曰、「此錢塘也。」毅起、趨拜之。錢塘亦盡禮相接、謂毅曰、「女姪不幸、爲頑童所辱。頼明君子信義昭彰、致達遠冤。不然者、是爲涇陵之士矣。饗德懷恩、詞不悉心。」毅搦退辭謝、俯仰唯唯。

③ 「大天蒼蒼兮、大地茫茫。人各有志兮、何可思量。狐神鼠聖兮、薄杜依牆。雷霆一發兮、其孰敢當。荷真人兮信義長、令骨肉兮還故鄉。齊言慙愧兮何時忘。」

④ 翌日、又宴毅於清光閣。錢塘因酒作色、踞謂毅曰、「不聞猛石可裂不可捲、義士可殺不可羞耶。愚有衷曲、欲一陳於公。如可、則俱在雲霄。如不可、則皆夷蕪壤。足下以爲何如哉。」毅曰、「請問之。」

錢塘曰、「涇陽之妻、則洞庭君之愛女也。淑性茂質、爲九姻所重。不幸見辱於匪人、今則絕矣。將欲求託高義、世爲親戚。使受恩者知其所歸、懷愛者知其所付、豈不爲君子始終之道者。」

毅肅然而作、欬然而笑曰、「誠不知錢塘君辱困如是。毅始聞跨九州、懷五岳、洩其憤怒、復見斷鎖金、掣玉柱、赴其急難。毅以爲剛決明直、無如君者。蓋犯之者

不避其死、感之者不愛其生。此眞丈夫之志。奈何簞管方治、親賓正和、不顧其道、以威加人。豈僕之素望哉。若遇公於洪波之中、玄山之間、鼓以鱗鬚、被以雲雨、將迫毅以死、毅則以禽獸視之、亦何恨哉。今體被衣冠、坐談禮義、盡五常之志性、負百行之微旨。雖人世賢傑、有不如者。況江河靈類乎。而欲以蠢然之軀、悍然之性、乘酒假氣、將迫於人。豈近直哉。且毅之質、不足以藏王一甲之間。然而敢以不伏之心、勝王不道之氣。惟王籌之。」

⑤ 毅曰、「似有命者。僕始見君子長涇之隅、枉抑憔悴、誠有不平之志。然自約其心者、達君之冤、餘無及也。以言『慎勿相避』者、偶然耳。豈思哉。泊錢塘逼迫之際、唯理有不可直、乃激人之怒耳。夫始以義行爲之志、寧有殺其壻而納其妻者邪。一不可也。善素以操眞爲志、尚、寧有屈於己而伏於心者乎。二不可也。且以率肆胸臆、酬酢紛綸。唯直是圖、不違避害。然而將別之日、見君有依然之容、心甚恨之。終以人事扼束、無由報謝。吁、今日君盧氏也。又家於人間。則吾始心未爲惑矣。從此以往、永奉懽好、心無纖慮也。」

⑥ 隴西李朝威絃而嘆曰、「五蟲之長、必以蠶者、別斯見矣。人裸也、移鱗鱗蟲。洞庭含納大直、錢塘迅疾磊落、宜有承焉。嘏詠而不載、獨可隣其境。愚義之、爲斯文。」

具体的に見てみると、①では柳毅は自らを「義夫」であると称し、②③では錢塘君が柳毅に対して「あなたの

信義」のおかげで我が姪が助かったと言う。④では柳毅は結婚話を持ちかけた錢塘君に対してそれは「直」ではないと反論し、⑤では後から④の時の心情を振り返って、とにかく「直」であることだけを考えていたのであつて、おまえを嫌っていたのではないと心情を吐露する。これだけ繰り返し龍王と柳毅の信義に関わる描写が登場することからは、この話の中で信義にまつわる事柄が確かにただのお題目ではなく、「柳毅伝」の骨格を形作る重要な要素となつていくことがうかがえる。

それでは「柳毅伝」はなぜ信義にまつわる事柄をテーマとしているのか。それは「柳毅伝」がそれ以前の水神説話を下敷きにしていくことと関係すると思われる。

三 水神説話と「信義」

「柳毅伝」がそれ以前の水神説話を下敷きにする部分があることは、従来から多くの指摘がある。それが最も良く表れているのは、手紙を言付かる場面だろう。同様の話は、例えば『搜神記』巻四「胡母班」の前半部分に見られる。

胡母班は泰山の側で会つた役人に、「泰山府君のお召しである。」と豪華な宮殿に連れて行かれた。そこでは宴席が設けられ、泰山府君は胡母班に「そなたを呼んだのは、娘婿の河伯に手紙を届けて欲しいからだ。」と言つた。どうすればいいか分からないとい

う胡母班に、泰山府君は河伯に会う方法を教えて帰らせた。

胡母班が泰山府君に言われた通りにすると、河伯の侍女が現れて手紙を持って行つた。しばらくするとまた出てきて、「河伯様がお呼びです。」と胡母班を連れて行つた。その宮殿でもまた宴席が開かれ、胡母班の去り際に河伯は礼として青い糸で編んだ靴を与えた。

この話はこの後死後の世界の方に興味が移っていつてしまふが、ここに水神に手紙を届けるよう依頼され、それを届けて報酬をもらふ、という形が示されている。この類型の話は他にもいくつか見られ、これが水神説話の一つの典型であつたことが分かる。

それでは水神には何故このような、手紙を届けて報酬をもらふ話が多く存在しているのか。それを考えるヒントとなる記載が『春秋』左氏伝に見られる。例えば僖公二十四年には次のような記事がある。

二十四年、春、王正月、…(中略)…及河、子犯以璧授公子、曰、「臣負羈縻從君巡於天下、臣之罪甚多矣。臣猶知之、而況君乎。請由此亡。」公子曰、「所不與舅氏同心者、有如白水。」投其璧于河。濟河、圍令狐、入桑泉、取臼衰。(二十四年、春、王の正月、…(中略)…河に及び、子犯璧を以て公子に授け、

曰く、「臣羈縻を負ひて君に従ひて天下を巡るも、臣の罪甚だ多し。臣すら猶ほ之を知るに、況んや君をや。此より亡げんことを請ふ」と。公子曰く、「舅氏と心を同じくせざる所の者あらば、白水の如き有らん」と。其の璧を河に投ず。河を濟り、令狐を囲み、桑泉に入り、臼衰を取る。)

亡命していた公子重耳が秦の軍とともに晋に帰国しようとして黄河を渡る場面、家臣の子犯が重耳に璧をささげて、「私はこのあたりで身を引かせていただきます。」と言つと、重耳はその璧を黄河に投げ込み、「もし舅殿(子犯のこと)と心を違えれば、河の神に罰を受けるだろう。」と誓いを立てる。杜預の注には「質信於河也。」(信を河に質するなり。)とあり、璧を誓いの証として河の神にささげたとしている。

同様の水神に誓いを立てるといふ記事は、文公十三年、襄公十八年、十九年、三十年、昭公三十年、定公三年など数多く見られる。その背景には、例えば、やはり死後水神となつたと言われる伍子胥に代表されるような、一度荒れ狂えば多くの人を害する荒ぶる神としての水神に対する恐れが存在すると思われる。それが故にこそ、誓いを立てる際の証人としたのだろう。そしてその「水神は信義を守る」という考えが、水神に頼み事をされて報酬を受け取るという話に繋がっていくのだと思われる。

そして龍も代表的な水神の一つであるため、やはり龍類小説の中にも依頼と報酬に関わる話や報恩譚が多く見られる。例えば『瀟湘録』『汾水老姥』（『太平広記』巻四百二十四）は、老婆が赤鯉だと思つて捕まえて育てていた龍が天に昇る際に宝珠を残し、後にこの宝珠は老婆の息子の治療薬になるという話である。このような、水神や龍が信義を守るといふ認識が「柳毅伝」の信義を守る龍王像に繋がっていくと思われる。

四 「柳毅伝」のテーマ

以上、水神や龍には信義を守るといふイメージが存在すること、そしてそれは水神に関する説話を下敷きにした「柳毅伝」にも信義を守る龍王像として受け継がれていることを確認した。

しかし「柳毅伝」は、その上にもう一段工夫を加えている。ここで注目したいのは、先の第二章で取り上げた、④の柳毅が結婚話を持ちかけた錢塘君に反論する場面、及び⑤のその時の心情を振り返った場面である。

④では縁談を断る際、柳毅は錢塘君に対して「錢塘君ともあるう方がこんなにも下らぬ者だとは。私はあなたが姪御を救いに行くのを見て、果断で実直な方だと思つたのに、酒の勢いに任せて人間を脅迫するとは、筋が通つていふと言えようか。私のちっぽけな体などあなたの鱗一枚ほどもなかるうが、それでもあなたには決して屈しない。」と堂々と断つて、錢塘君の信義にかなわない振

る舞いを強く非難している。そして⑤ではその時のことを振り返つて、「あの時は、夫を殺して妻を奪うような曲がつたことはできない、とにかく筋の通すことを考えるのに精一杯で、我が身のことなど顧みる余裕はなかつた。」と、とにかく我が身は二の次で信義を重んずることしか頭になかつたと言う。この二つの場面では、人間であるはずの柳毅が龍王さえも叱り飛ばしており、まさしく龍王をも上回るほどの信義を發揮する強い人間として描かれている。

しかし全体を通してみれば、柳毅は決して絵に描いたような完全無欠のヒーロー、或いは、「任侠」をテーマとした唐代の豪侠小説の主人公とは全く違う。錢塘君が荒々しく飛び出していくのを眼にする、ぶるぶる震えながら「生きて帰らせてくれ。」などと頼みこんだり、錢塘君達に礼を言われれば逆にぺこぺこしたりするような、平凡な等身大の人間として描かれている。また④でも、去り際に娘を見ると心残りを覚えたとも言ひ、柳毅は実は彼女に愛情めいたものを感じてはいたが、信義を守るために断つたのだと言ひ、信義と愛情の間の葛藤があったことも吐露している。

このような、信義を守る龍王というイメージを基礎に置きつつ、しかし普段は弱い人間であっても、勇気を振り絞り、異性への愛情や命惜しさといったものを振り切つて、龍王にも勝る信義を發揮することができるのだという、人間の内面の強さを語るこそが「柳毅伝」の

テーマなのではないだろうか。そのように、柳毅が信義を守るという点で龍王にも勝る存在であったからこそ、結末で柳毅は龍王の眷属と認められて龍宮へと入り、通常は離別で終わることの多い異類婚姻譚でもありながら、最終的に破局を迎えなかったのかもしれない。

五 『統玄怪録』 「蘇州客」 について

一方、龍王と信義に関して非常に興味深いのが、次に挙げる『統玄怪録』巻三「蘇州客」の話である。

- (1) 蘇州で物乞いをしていた劉貫詞は秀才の蔡霞と義兄弟となった。霞に十万銭と引き替えに自分の故郷に手紙を届けて欲しいと頼まれ、貫詞が引き受けると、蔡霞は「実は我が家は鱗ある者の長で、涓橋の下に家を構えております。眼を閉じて橋脚を叩けば、迎えの者が来るはずです。ただし母に謁見する際には必ず末の妹も同席させて下さい。彼女は大層聡明なので、彼女にあなたを手伝わせましょう。」と言った。
- (2) 貫詞は洛陽の涓橋に行ってみたが、淵は深くて霞の家に行ける気がしない。しかし龍神が騙すはずがないと思い、言われたとおりにしてみると、取り次ぎの者が現れて龍宮へ連れて行かれた。貫詞が取り次ぎを通して言付かった手紙を渡すと、龍の母は「あの子は上官の不興を買ってここから離れ、三年音信不通でしたが、あなたのおかげで連絡がとれました。」と礼を述

べた。貫詞は「御子息と兄弟の契りを結びましたからには、妹君にもお会いしようございます。」と言った。しばらくすると美しい龍の妹が現れた。

- (3) 会食中、母は突然眼が赤くなつて貫詞を見つめた。妹は慌てて、「この方には『心配事を無く』して頂いているのですから、不安にさせてはいけません。」と言った。そして「手紙には十万銭差し上げるようにとありますが、重いので同じ値打ちのものではないかが良いでしょうか。」と言った。貫詞は固辞したが、母が是非にと言つて鎮国椀を持つてこさせた。

- (4) 会食中、母の眼がまた赤くなつて涎を垂らした。娘は慌てて母親の口を掩つて、「母は持病の発作で失礼をしてしまいますので、兄上はお帰りになされた方がよろしいかと。」と言ひ、鎮国椀を貫詞に渡して、「これは罽賓国の椀で、かの国ではこの椀によつて災いを鎮めますが、唐では使い道がありません。十万銭の値がついたらお売り下さい。」と言ひ、見送りもせず貫詞を帰らせた。

- (5) もらつた椀は大したものには見え、市場でも安い値を付けられたが、「龍神は信義を貴ぶから人を騙すはずがない。」と考えた貫詞は、毎日市場に行つた。一年後、西域の商人がこの椀の値段を尋ねた。貫詞が二十万銭だと答えると、商人は「これは二十万銭どころのものではないが、中国では役に立たない。十万銭でどうだ。」と言つた。貫詞は承諾して椀を渡した。

(6) 商人は「これは四年前、罽賓国で龍に盗まれたもので、国王は莫大な金でこの腕を買い戻そうとしている。

また罽賓国の守護龍が天に訴えて追つ手がかかっているが、天界の役人は厳しくて自首することはできないので、おまえにこれを送り返させたのだ。妹に会わせたいのは、母親がおまえを食うのを防ごうとしたのだ。これが『心配事を無くす』ということだ。五十日後、運河の波が高く上がって太陽を隠したら、霞が戻ってきた徴だ。」と言った。貫詞がなぜ五十日なのか尋ねると、それは私がこの腕を持って山を越える頃だからだと答えた。五十日後、果たしてその通りになった。

この話について、内田道夫氏は「小説としては柳毅伝よりも、より素朴であり、民話あるいは志怪の世界に近い。」と述べられている。しかしこの話はむしろ、出来としては「柳毅伝」には遠く及ばないかもしれないが、かなり強い創作性を以て作られたものであると思われる。確かにアウトラインだけを取ってみれば、『搜神記』『胡母班』に代表される、水神に手紙を言付かって報酬をもらう話の系譜に連なるものであり、またもらった宝物が胡人の商人によつて高く買い取られるという結末は、所謂胡人買宝譚として唐代小説にしばしば見られるものである。しかし確かにこの話は、一見ありふれた水神に手紙を言付かって報酬をもらう話のように展開していくものの、所々にやや不自然な点が見られる。例えば次の場

面である。

遂命飲饌、亦甚精潔。方對食、太夫人忽眼赤、直視貫詞。女急曰、「哥哥憑來、宜且禮待。況令消患、不可動搖。」……(中略)……又進食、未幾、太夫人復瞻視眼赤、口兩角涎下。女急掩其口曰、「哥哥深誠託人、不宜如此。」乃曰、「娘年高、風疾發動、祇對不得。兄宜且出。」女若懼者。遣青衣持碗、自隨而授貫詞曰、「此罽賓國腕。其國以鎮災厲。唐人得之、固無所用。得錢十萬、即貨之。其下勿鬻。某緣娘疾、須侍左右、不遂從容。」再拜而入。(遂に飲饌を命ずるに、亦た甚だ精潔たり。方むかに對ひ食するに、太夫人忽ち眼赤く、直ちに貫詞を視る。女急ぎて曰く、「哥哥憑りて來たらしむれば、宜しく且く礼もて待すべし。況んや患わざひを消さしむれば、動揺せしむべからず」と。……(中略)……又た食を進め、未だ幾ならずして、太夫人復た瞻視して眼赤く、口の兩角より涎下る。女急ぎて其の口を掩ひて曰く、「哥哥深誠もて人に託せば、宜しく此の如くすべからず」と。乃ち曰く、「娘年高、風疾發動せば、祇しみ對せんとするも得ず。兄宜しく且く出づべし」と。女懼るる者の若し。青衣を遣りて碗を持たしめ、自ら隨ひて貫詞に授けて曰く、「此罽賓国の腕なり。其の國以て災厲を鎮む。唐人之を得るも、固より用ふる所無し。錢十萬を得ば、即ち之を貨れ。其の下は鬻

ぐ勿れ。某娘の疾に縁りて、須らく左右に侍るべければ、遂に従容せず」と。再拝して入る。」

この傍線部分では、会食中に龍の母親は突然目が赤くなり、劉貫詞を見つめる。慌てて娘がごまかして事なきを得るが、またしばらくすると今度は目が赤くなるだけではなく、涎まで垂らし始める。フオーしきれないと考えた娘は、劉貫詞に約束の宝物を渡して、さっさと帰れとばかりにろくに見送りもせず追い返してしまうのである。そして最も注目すべきは結末部分である。

客曰、「此乃罽賓國鎮國椀也。在其國大穰、人民忠孝。此椀失來、其國大荒、兵戈亂起。吾聞龍子所竊、已近四年。其君方以國中半年之賦召贖。君何以致之。」貫詞具告其實。客曰、「罽賓守龍上訴、當追尋次。此霞所以避地也。陰冥吏嚴、不得陳首、藉君爲郵送之耳。殷勤見妹者、非固親也。慮老龍之嘆、或欲相啖、以其妹衛君耳。此椀既去、渠亦當來。亦罽患之道也。五十日後、漕洛波騰、濺灑竟日。是霞歸之候也。」客曰く、「此乃罽賓國の鎮國の椀なり。其の国に在りては大いに穰かにし、人民をして忠孝ならしむ。此の椀失はれて來、其の国大いに荒れ、兵戈乱起す。吾聞く龍子の窃む所と爲り、已に四年に近しと。其の君方に国中の半年の賦を以て召贖す。君何を以て之を致すか」と。貫詞具に其の實を告ぐ。

客曰く、「罽賓の守龍上訴し、追尋の次に当たると。此霞の地を避くる所以なり。陰冥の吏は嚴にして、陳首するを得ず、君に藉りて爲に之を郵送するのみ。殷勤に妹に見えしむるは、固より親しむに非ざるなり。老龍の嘆を慮り、或いは相啖らはんと欲せば、其の妹を以て君を衛らんとするのみ。此の椀既に去けば、渠も亦た当に來たるべし。亦た患を銷すの道なり。五十日の後、漕洛の波騰、濺灑たること竟日ならん。是霞の帰るの候なり」と。

劉貫詞のもらった宝物を鑑定した西域の商人が、実はこれは罽賓国から盗み出されたもので、天界から追つ手がかかって追い詰められた龍が、自首して捕まるのを嫌って劉貫詞の手を介して宝物だけを返して穩便に済ませようとしたのだと種明かしをする。ここに至って、それまでは一見「柳毅伝」など同様の水神に手紙を言付かつて報酬をもらう話に見えていた枠組みが一変し、実は全ては龍の企んだお芝居であったのだということが明らかされるのである。

この枠組みの転換をよく象徴しているのが、「消患」という言葉である。この言葉は二箇所が登場するが、その二箇所というのは、直前に引いた二箇所の四角で囲った部分である。初めから読んで最初の「消患」という言葉に行き当たった読者には、ここでいう「患い」つまり「心配事」というのは、手紙を届けたことで解消される「長

年の音信不通」のことだと考えるだろう。しかし二つ目の「銷患」という言葉に至って、読者は初めて先の「心配事」というのは実は「長年の音信不通」ではなく、「盗んだ宝物の返還」という意味であり、すべては龍の仕組んだお芝居であつたことが分かるという、意味の二重性を利用した書き方となつているのである。

以上のようにこの話はかなり凝つた構成を持つものなのであるが、それを支えているのが、信義を守る龍王というイメージである。「龍王がでたらめを言うはずがない」という考えがあればこそ、それをがらりとひっくり返した際の衝撃が大きくなる。実際、この「柳毅伝」の数分の一しかない話の中で、「龍神不当我欺。」（龍神 当に我を欺くべからず）、「龍神貴信、不当欺人。」（龍神 信を貴べば、人を欺くべからず。）と言うように、龍王は信義を守るといふ事柄が、まるで読者に言い聞かせるかのよう¹⁰に繰り返して強調されている。こうして見てみると、つまりこの話は信義を守る龍王という伝統的なイメージを踏まえつつ、それを最後に敢えてひっくり返すことで意外な展開を作り出すという構成をしていると推測される。

六 『原化記』『張老』について

『続玄怪録』『蘇州客』ほど凝つた構成というわけではないが、やはり龍類小説の典型的パターンを踏まえた上で、敢えて最後にそれをひっくり返すような結末を与え

る話¹¹が他にも幾つか存在する。まず『原化記』『張老』（『太平広記』巻四百二十四）を見てみたい。

- (1) 荊州の寺の側に龍の住む川がある。この龍は時に風や雷で樹木を傷つけることがあつた。寺の鐘撞きの張老は術士であつたので、密かに術によつてこの龍を退治しようとしていた。
- (2) 龍は張老が自分を退治しようとしていることを知つて人間に姿を変え、寺の僧に「どうか張老を止めて欲しい、説得してくれたら宝珠を差し上げて他所に移ろう。」と頼んだ。僧は承諾した。
- (3) 僧は張老に龍を許すように言つたが、張老は「和尚は宝珠と引き替えに頼まれたのではないですか。この龍は吝嗇な奴なので、きつと後悔することになりますよ。」と言つた。しかし僧が信じなかつたので、結局張老は龍を許して姿を消し、龍は宝珠を贈つてきた。
- (4) 数日後、大雨が降つて寺は破壊され、宝珠が奪われた。果たして張老の言つたとおりであつた。

この話の大筋は、龍に頼み事をされて報酬をもらつという、龍類小説に良く見られるパターン¹²の話である。例えばよく似た話として、『宣室志』佚文「任頊」（『太平広記』巻四百二十二）を挙げる。

- (1) 樂安の任頊が山中に隠棲していた所、老人が訊ねて

きた。老人は「実は自分は西の淵に住む龍なのだが、ある者に殺されそうになっているので助けて欲しい。」と言った。項は「自分は詩書礼楽の知識があるだけで、あなたを助けるような術は使えない。」と答えた。老人は「二日後の昼、淵のほとりに道士が現れて私を殺そうとする。あなたはその時『天に命有り、黄龍を殺す者は死せん。』と叫んでくれればよい。きっと御礼をしよう。」と言った。

- (2) 二日後淵に行ってみると、確かに道士が雲の中から現れて、袖から護符を取り出して淵に投げ込むと、淵の水が涵れて黄龍が姿を現した。そこで項が言われた通りに叫ぶと、淵の水は元に戻った。道士は怒って何度も繰り返したが、項はそのたびに叫んで邪魔をした。道士は「私は十一年目にしてやっとこの龍が食えるというのに、儒士である貴様がなぜ異類を救おうというのか。」と罵って去って行った。
- (3) その晩、夢に先の老人が現れて項に礼を言い、淵の岸に宝珠を置いておくと言う。項が行ってみると、確かに宝珠が置いてあった。
- (4) 項がこの宝珠を広陵の市場に持って行くと、胡人がそれを見て「これは驪龍の宝珠だ。」と言って、数千万で買った。

この両者を比較してみると、(1)から(3)まではどちらも「殺されそうになった龍が第三者に助けを求めて報酬を

与える」という展開になっている。しかし『宣室志』の(4)が胡人買宝譚的な結末となるのに対して、『原化記』の(4)は「後数日、忽大雷雨、壞此僧舍、奪其珠。」(後数日、忽ち大いに雷雨あり、此の僧舎を壊し、其の珠を奪ふ。)と、龍の裏切りによって宝珠は奪還され、寺まで破壊されてしまうという結末になっている。確かに人間に対して悪事を働く龍の話は多く存在する。しかしこの『原化記』の話は、明らかに「龍に頼み事をされて御礼をもらう」という話型を踏まえている。ここで張老から諫言されたにもかかわらず龍を信じてしまった僧は、単に欲をかいたというだけではなく、一般的な通念として「龍王が人を騙すはずがない。」と信じていたのだろう。しかしその期待は最後に裏切られてしまうのである。

更に言えば、『原化記』の(3)で張老は「此龍甚窮、唯有此珠。性又悖惡。今若受珠、他時悔無及。」(此の龍甚だ窮まりて、唯だ此の珠有るのみ。性又た悖惡なり。今若し珠を受けば、他時悔ゆるも及ぶ無からん。)と龍王の裏切りをはつきり予言し、更に最後に「果如張老之言。」(果たして張老の言の如し。)とそれが強調されていることを考えれば、この話は「信義を守る龍王」というイメージをひっくり返しつつ、更にそれを見抜いていた張老の力が強調されていると考えられる。その背景には道教の喧伝、乃至仏教に対する優位性を主張する意図を見て取ることができる。

七 『博異志』『許漢陽』について

続いて『博異志』『許漢陽』を見てみたい。

(1) 許漢陽は船旅の途中の日暮れ方、ある湖に迷い込んだので、そこに舟を泊めることにした。岸边には豪華な建物があり、入ってみると美しい侍女が二人出迎えてくれ、「お嬢様はお着替え中です。」と言った。

(2) 更に奥に通されると、何とも立派な庭と建物があり、六、七人の侍女を引き連れた女主人と会った。女主人が漢陽の来意を訪ねると、漢陽は知らぬ間に来ってしまったと答え、見たこともない食べ物や御馳走になった。庭には珍しい樹木があり、侍女が女主人の命で鳥を連れてきて鳴かせると、樹上に花が一斉に開いた。その花一つひとつに小さな美人が入っており、それぞれに楽器を奏でた。その光景と音楽を愛で、かぐわしい香りの美しい花を眺めつつ、漢陽と女主人は酒を楽しんだ。

(3) 二更になって宴席が一段落つくと、花は皆散ってしまった。女主人は「江海賦」なる文章を漢陽に読ませ、続きを吟じて筆写させた。漢陽はその続きに自作の文章を書き継ぎたいと申し出たが、断られた。

(4) 四更になると侍女から帰るように言われた。夜が明けてみると、昨夜過ごしたところには林しかなかった。辺りの人が騒いでいるので聞いてみると、「昨夜四人が溺れた。三人は二更に死に、あと一人は今にも死にそ

うだ。巫女にお祓いをさせると、その男は『昨夜龍王の娘達がここで宴会を開き、俺たち四人を捕らえて酒にした。客があまり飲まなかったので、俺は帰ることができた。』と言っていた。」とのことだった。漢陽が「客とは誰のことだ。」と訊ねると、「どこぞの貧乏書生だが、もう帰ったそうだ。」と答えた。漢陽は昨夜のことを思い出し、気分が悪くなった。そして血を数升吐き出し、昨夜飲んだ酒は血であったことを知った。三日経ってやっと元に戻った。

この話も、途中まではほぼ典型的な別世界訪問譚、龍宮訪問譚である。特に(2)では、多くの言葉を書き加えてきらびやかで美しい龍宮のありさまが描かれている。しかし(3)で許漢陽が自作の文章を書き継ぎたいと申し出で断られる辺りから、やや不穏な空気が漂い始める。そして(4)で昨夜飲んだ酒は実は全て人間の生き血であったという、ある種猟奇的な感すらある事実が示される。それが(2)の多くの言葉を書き加えた典雅できらびやかな龍宮の様子や美しい龍女達の姿と相俟って、その背後に潜んでいた不気味さ、恐ろしさが強調される結末となっている。

この『博異志』『許漢陽』の龍女は約束を破るなどの信義に背く行為をしているわけではないし、話の構造としても龍宮訪問譚の典型的な話型を越えるものでもない。しかしその典型的な美しい龍女の姿に対して、人の生き血を吸う恐ろしい裏の姿を重ね合わせることで、物語に

得も言われぬ不気味な雰囲気を付加することに成功している。

おわりに

本稿では、主に「柳毅伝」、「続玄怪録」「蘇州客」、「原化記」「張老」、「博異志」「許漢陽」の四編を取り上げて考察を行った。その結果、どの話も信義を守る正義の龍王像を踏まえつつ、それぞれが新たな要素を付け加えることで、新たな物語を構成していると考えた。

「柳毅伝」は、本来弱々しい存在であるはずの人間が、時には龍王にも勝る信義を発揮し得るといふ、人間の内面の強さが語られている。「続玄怪録」「蘇州客」と『原化記』「張老」は、同じく信義を守る龍王像を基礎に置きながらも、「実はそうではない。」とそれをがらりとひっくり返すことで、意外性を持った結末を迎えるという構成が取られている。特に『続玄怪録』「蘇州客」は、文中に「龍神は信義を守る」といふフレーズを繰り返し挿入することで読者の思考を誘導し、それをひっくり返す結末に向かつて落差を作っておくことで、読者により強い衝撃を与えるという周到な書き方がなされていることは注目に値する。そして『博異志』「許漢陽」は、他の三編のように信義にまつわる内容は出てこないが、龍類小説の典型的話型を踏まえた上で、そこに逆方向の要素を付け加えることで物語に独特の雰囲気を与えていると考えた。

この四篇は、どれも龍のイメージや龍類小説の典型的話型を基礎に置きつつも、そこに新たな要素を加えて構成されたものである。それは従来の固定観念からの脱却と新たな文学的な試みを意味しており、中・晩唐の文学的趨勢と一致するものと言えるだろう。⁽¹²⁾

更に技術的な観点からは、『続玄怪録』「蘇州客」に見られる、「消患」という言葉に二つの意味を掛ける手法、結末の意外性を強調するために読者をミスリードへと導く書き方の工夫などは、特筆に値するものである。そこには当時の小説家達の強い創作性、話を面白く、オリジナリティあるものにしよとす意図を見て取ることができる。

またこの四篇の中では「柳毅伝」に対する評価が突出して高く、他の三篇はあまり取り上げられることがないが、人を害する悪龍・毒龍として描かれる龍は獣的な龍が多いのに対し、人の姿をとって人語を解する存在でありながら人を害する龍王という存在が後世の小説などに与えた影響を考えれば、これらの話もまた十分注目に値する作品なのではないだろうか。⁽¹³⁾

注

(1) 龍の起源や様々なイメージについては、林巳奈夫『龍の話 画像から解く謎』(中公新書一九九三年)を初めとして、荒川紘『龍の起源』(紀伊國屋書店一九九六年)など、多くの論者が発表されている。

(2) 以下小説のテキストには、基本的には通行本を用い、併せて『太平広記』諸本などを参照している。なお以下長い話を取り上げる場合は、紙幅の関係上、原文は省略してあらすじを示すこととする。

(3) 近藤春雄『唐代小説の研究』(明治書院 一九七一年) 三六五頁。近藤氏以降の論文としては、富永一登「柳毅伝」考——龍説話の展開——『学大國文』第三号 一九八九年。のち『中国古小説の展開』研文出版 二〇一三年) などがある。

(4) 例えば李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』(南開大学出版社 一九九三年) は、「柳毅伝」ではなく「洞庭靈媿伝」として項目を立てている。

(5) 注4に挙げた李劍国『唐五代志怪伝奇叙録』では、この「柳毅伝」末尾から「知朝威欲以頌信義也」(朝威の以て信義を頌せんと欲すると知るなり)と指摘されているが、「雖然、傳旨未止於此、不惟言義、亦言情耳」(然りと雖も、傳旨未だ此に止まらず、惟だに義を言ふのみならず、亦た情を言ふのみ)とも言われている。また小南一郎「霍小玉伝に見る唐代伝奇小説の挫折」『桃の会論集』二集 二〇〇四年。のち『唐代伝奇小説論 悲しみと憧れと』第四章 霍小玉伝——伝奇小説の挫折——岩波書店 二〇一四年)でも、「柳毅伝」の中核に任侠の論理が関わっていることが指摘されている。

(6) 例えば内田道夫『中国小説研究』(評論社 一九七七年)「第六章 唐の中期以降の作品 (一)——柳毅伝、水神説話の展開について」、澤田瑞穂『中国の民間信仰』(工作舎 一九八二

年)「第三章 龍母伝説 龍宮伝書——水神に手紙を届ける話」、小南一郎「中国の龍と龍宮」『説話・伝承学』第二十号 二〇一二年)など。

(7) 例えば注6に挙げた内田氏の論では『水経注』「溱水」に「晉中朝時、縣人有使至洛者。事訖將還、忽有一人、寄其書云、『吾家在觀岐前。石閭懸藤、即其處也。但叩藤、自當有人取之。』使者謹依其言、果有二人出外取書。並延入水府、衣不霑濡。言此似不近情、然造化之中、無所不有。穆滿晉中朝時、縣人有使至洛者。事訖將還、忽有一人、寄其書云、『吾家在觀岐前。石閭懸藤、即其處也。但叩藤、自當有人取之。』使者謹依其言、果有二人出外取書。並延入水府、衣不霑濡。言此似不近情、然造化之中、無所不有。穆滿西遊與河宗論寶、以此推之、亦爲類矣。」という話があることが指摘されている。

(8) 以上に述べた水神と信義をめぐる問題については、拙稿「水神説話の伝承——『搜神記』「河伯媿」をめぐる——」(岡村貞夫博士古稀記念中国学論集) 白帝社 一九九九年)で詳しく論じた。

(9) 注6に挙げた内田氏の論を参照。

(10) 『統玄怪録』の創作性については、富永一登「唐代小説の創作意図——「杜子春」を中心として——」(松本肇・川合康三編『中唐文学の視覚』創文社 一九八九年。のち『中国古小説の展開』研文出版 二〇一三年)でも論じられている。

(11) 『原化記』と道教の関係について、内山知也「原化記について」(『文藝言語研究 文藝篇』第七号 一九八二年)は、「こ

ういう道教の信仰を原化記の撰者洞庭子も信じていたのである。「一種の儒道兩教の混交した觀念から、『化』の存在を信じ、物語を書いているといえよう。」と指摘している。

(12) 唐代小説の創作性と以前の物語の改編という問題については、佐々木睦「裴鏘『伝奇』とパロディ」(『饜饕』第六号 一九九八年)でも論じられている。

(13) 邪悪な龍王像については、仏教に於ける龍のイメージが関わっている可能性がある。辻本久子「中国の水神説話・伝説 — 斬龍護国型説話の発生と形成に関する一考察 —」(『和漢語文研究』第三号 二〇〇五年)では、悪龍・毒龍の説話が西域から流入してきた可能性を指摘している。また本稿で扱った話の内、『続玄怪録』『蘇州客』と『博異志』『許漢陽』に出てくる龍王が女性であることは、『妙法蓮華經』卷五「提婆達多品」(大正藏二六二)の所謂「龍女成仏」の話の思い起こさせる。この宗教と龍のイメージの変化という問題については、稿を改めて論じたいと思う。